

なぜリベラルは
嫌われているのか

常見陽平

リベラルを批判することは、

裏切ることではない！

リベラルがもう一度、社会を変える思想として
力を持つためのリベラル批判。

なぜリベラルは嫌われているのか

常見陽平

星海社

401



SEIKAISHA
SHINSHO

なぜ「リベラル」は嫌われているのだろうか？

2020年代半ばの日本では、「リベラル」という言葉そのものが、扱いにくい存在になっている。いや、ストレートに言おう。嫌われている。

自分をリベラルだと思う人も、そうではない人も、この言葉を口にするとき、どこか身構えているのではないか。リベラルを自認する人は、自分や、支持する政治家、論者が批判される様子にモヤモヤし、ときに怒り、ときに不甲斐なさを覚えている。リベラルに距離を置く人は、「もう関わりたくない」と思っているかもしれない。呆れている人も、反発したくなる人もいるだろう。

「リベラル」は、政党や政治家だけを指す言葉ではない。思想や価値観、メディアで発言する論者、市民のふるまいにまで貼られるラベルだ。権力に異議を唱え、何かにNOと言う。差別や不平等に抗い、社会を変えようと声を上げる。そこには、守るべき思想も理念

もある。

しかし、その姿勢が「正義の押し売り」に見えることがある。異論を聞かず、少し違う意見を述べただけで相手を敵側に分類する。すると、何を言っているかよりも、言葉遣いや態度のほうが先に目につき、肝心かんじんの理念が届かなくなる。冷笑される。さらに悪いことには、相手にもされなくなる。リベラルが望む政治や社会は、ますます遠のいていく。

私が最も深刻だと考える「リベラル嫌い」は、右寄りの人がリベラルを叩き、冷笑することではない。それは、想定範囲内だ。より深刻なのは、自由や人権、平等、多様性といったリベラルな価値観を大切に思っている人までが、いまのリベラル政党や政治家、リベラルを名乗る論者、活動家、知識人の言葉や態度に拒否反応を示していることだ。SNSで繰り返される糾弾きゅうだんや、間違えた人間を永久に切り捨てる態度には息苦しさを感じる。権力には厳しくあるべきだと思う一方で、他人の言葉尻ことばじりを捉えて採点し、少しでも異論を述べた人を敵側に分類する振る舞いには賛同できない。

リベラルと名乗ることには、ためらいがある。それでも、誰かの自由や尊厳が傷つけられることには黙っていられない。こういう人は、決して少なくないだろう。リベラルな価値観を捨てたわけではない。ただ、「リベラル」という言葉が、いつの間にか窮屈きゆうくつな所属証

明のようになり、声を上げられずにいる。いわば、「隠れリベラル」だ。私は、そういう人に向けて本書を書いた。「あなたは一人ではない」と伝えたい。

さらに、リベラルを自認する人が、現在のリベラルを批判した瞬間に、「転向した」「右傾化した」「保守に媚びた」「闇落ちした」「裏切り者だ」と裁かれることがある。私もそういう目にあつた。批判の内容が検討される前に、発言した人の立場が裁かれる。内側から出た疑問まで、外部の敵による攻撃と同じように処理される。これでは、自由や多様性を掲げながら、内部の異論を認めないことになる。

この本を、「また一つのリベラル叩き」と受け取る人もいるかもしれない。だが、私が書きたいのは、その逆の本である。リベラルを冷笑し、揶揄するのではない。リベラルがもう一度、社会を変える思想として力を持つために、どこで言葉が届かなくなったのかを考えたい。

現在のリベラルの不寛容さを批判することは、右派や保守の側にある問題を免罪することではない。差別、排外主義、歴史の歪曲、少数者への攻撃、権力による異論の封じ込めには、明確に反対する。本書が主にリベラルの問題を扱うのは、右派の問題のほうが軽いからではない。私自身がリベラルであり、その理念を諦めたくないからである。

本書には、二つの仮説がある。一つは、現在のリベラルが、正しさを掲げる一方で、異論や間違いに不寛容になっているということだ。もう一つは、リベラルが生活と労働の実感から離れてしまったということである。どれほど正しい理念であっても、日々の暮らしの苦しさや、働くことのしんどさ、将来への不安と結びつかなければ、人には届かない。私は、働く人の不安、若者の早期離職、就職氷河期世代の苦しさ、職場の息苦しさを長く見てきた。だから本書では、働く人の現場からリベラルを考えたい。政治の言葉と生活の実感は、どこですれ違ってしまったのか。その距離を見つめ直したい。

同時に、私も高い場所から誰かを裁ける立場ではない。仲間内の「正しさ」に流され、誰かを採点する側に回ったことがある。根拠の不十分な発言をし、謝罪したこともある。自分が批判されたとき、素直に聞けず、身構えたこともある。左派・リベラルを自認しながら、間違いを繰り返してきた当事者の一人だ。だから、この問題を他人事^{ひとごと}として書くことはできない。

リベラルを批判することは、リベラルを裏切ることではない。誰かをリベラルから追放したいわけでもない。窮屈になったリベラルの内側に、もう一度、異論と対話の余地をつくりたい。外側から石を投げるのではなく、内側からドアを蹴^けり開けるような本にしたい。

いまのリベラルに失望しても、この社会や人間の可能性まで諦めたくはない。自由や人権という理想を、働き、暮らす人の日々から考え直したい。人は間違える。社会は思いどおりにならない。それでも、理念を現実の中で働かせる道はあるはずだ。そこから、リベラルの再起動を考えたい。まずは、「リベラル」とは何かを確認することから始めよう。

2026年夏

常見陽平

※本書は、原則として2026年8月上旬までの政治状況をもとに執筆している。その後、中道改革連合、立憲民主党、公明党をめぐる再編協議が進み、8月末には3党合流の断念など、大きな動きがあった。本書では、中道改革連合の結党と2026年衆議院選挙を中心に論じており、その後の政界再編については分析の対象としていない。

目次

はじめに 3

序章 リベラルとは何か？ 9

第1章 なぜ「正しさ」は届かないのか 25

第2章 「生活者ファースト」が届かなかったわけ 51

第3章 リベラルは生活者・労働者とズレている 89

第4章 リベラルを再起動する 129

おわりに 155

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」、としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文



SEIKAISHA
SHINSHO